Osaka University Knowledge Archive

Title	賀川豊彦と海洋文明 : 死線と大震災を越えて
Author(s)	濱田, 陽
Citation	宗教と社会貢献. 2011, 1(1), p. 53-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/16840
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

論文

賀川豊彦と海洋文明

―死線と大震災を越えて―

濱田　　陽*

Toyohiko Kagawa and Oceanic Civilization

Beyond the Death line and the Great Earthquake

HAMADA Yo

論文要旨

死線と大震災を越えて海の自然･宗教･社会を結んだ賀川豊彦(1888−1960)。その社会事業と思想は、幼年期に孤独な心をとらえた海の豊かさと、少年期に出会ったキリスト教の双方から大きな影響を受けていた。彼にとって、自然と宗教は、近代資本主義のさまざまな矛盾に立ち向かうアイデアと勇気を与えてくれる二つの軸であった。

本論文では、賀川の活動のダイナミズムが、海の自然・宗教・社会の三つのファクターのつながりにあることを浮き彫りにする。宗教と社会の関係に自然のファクターが加わることで、文明的課題に対する総合的アプローチが特徴となる点を分析したい。

キーワード　賀川豊彦、自然、海、宗教、キリスト教、社会、資本主義、大震災、文明

Toyohiko Kagawa (1888-1960) was deeply inspired by nature of the sea in his lonely childhood. He encountered religion (Christianity) as a teen. Both of Christianity and the sea had great influence on his social movements and thought. Nature and religion were two axes by which he got various ideas and courage to solve many social problems of modern capitalism.

This article focuses on the linkage among three factors of nature of the sea, religion, and society in the dynamism of Kagawa's activities and analyzes his unique general approaches to dealing with severe problems of the modern civilization.

Keywords: Toyohiko Kagawa, Nature, Sea, Religion, Christianity, Society, Capitalism, Great Earthquake, Civilization

* 帝京大学文学部日本文化学科准教授　tnhamada@main.teikyo-u.ac.jp

1. 東洋の使徒

フランシスコ・ザビエルは東洋の使徒と言われた。しかし、私たちは、東洋人、日本人の使徒をもっている。賀川豊彦は二十世紀における〈東洋の使徒〉といってよい人物である。

使徒は忙しい。海をめぐり、都市と都市、町と町、村と村を訪問しなければならない。賀川ほど日本の数多くの港湾をまわった宗教者はおそらくいないだろう。なぜ彼は、これほど活動できたのだろうか。活発だった彼の動きを追走し、そのメッセージをよみがえらせてみよう(1)。

彼は、近代資本主義文明の煩悶を正面から受け止め、理想の実現のために常に新しい事業にチャレンジしつづけた。賀川が体験した近代日本の煩悶と希望は、海洋アジアに位置する日本の地勢学的条件に深い関わりをもつものであった。

彼がどのような思想をいだき、いかなる活動をなしたのか。その思想と実践を統合的にとらえたとき、どのような知恵が浮かび上がってくるのか。賀川のメッセージが投げかける意味を探求しよう。

2. 社会事業と海洋

賀川豊彦と海

海洋日本は賀川の成長の場、苦しみの場、チャレンジの場であった。

1888（明治 31）年に彼が生まれたのは、神戸湾に面した、父が営む船舶運送を生業とする回漕店のなかだった。父母が亡くなり引き取られた賀川本家は、神戸と瀬戸内海をへだてた徳島県の吉野川下流域、鳴門（なると）海峡に近い村落にあった。そこで彼は、5 歳から 17 歳までを過ごしている。

この地域は、青色染料としての藍（あい）生産が平安時代に始まり、江戸時代の全国的な木綿生産の普及とともにめざましい成長をとげて全国の藍市場を独占した。近代化による没落前は賀川家もそうして発展した大藍商の一つであり、賀川本家の興隆に海運が大きくかかわっていた。

16 歳でアメリカ人宣教師ハリー・マヤスより洗礼を受けクリスチャンになる。マヤスの属するプレスビテリアン・チャーチ（長老教会）はカルヴァン派の一派で、関西圏の海沿いに活動を展開し、高知から伝道を始めて徳島に及んでいた。

大正時代最大のベストセラーとなった自伝的小説『死線を越えて』（1920（大正 9）年）三部作のうち、上巻 3 分の 2 は、肺結核に煩わされた 18 歳の賀川が 1907（明治 40）年に 9 ヶ月の療養生活をおくった愛知県三河湾の漁村で書かれたものだ 。

近代資本主義がつくりだした港湾都市とスラム

そして、彼の社会活動は、港湾都市のスラムに始まる。1909（明治 42）年 12 月 24 日、クリスマス・イブにあたる日に、賀川は、台車にわずかの荷物を載せただけで、当時日本最大のスラムといわれた神戸市新川の地に入っていった。結核を煩い、医師から余命数ヶ月と告げられていた賀川は、最も困難な場所で、人への愛に生きたイエスに習う生活を実践してみたいと考えた。それは大望有った 21 歳の若者にとって文字通り命がけの挑戦だった。

なぜ、神戸にスラムが形成されていたかといえば海洋文明、そして、近代資本主義の矛盾に端を発している。神戸開港（1868（同元）年）により近代資本主義の荒波に飲まれ、激しい価格競争にさらされた農村では旧来産業が衰退、貧困家庭の次男、三男は農村に留まることができず港湾に突如出現した都市に流れて行かざるをえない。そして、生成する都市では病気、怪我、不景気などで失職し、まともな仕事につけずに生活に破れた人々が貧困に突き落とされ、行き場を失って安宿に身を寄せるようになる。しかし、そうした木賃宿は 1889（同 32）年に旧神戸市内で禁止され、新川地区に集中していく。

貧しい人々には荷物を担いで運ぶ人夫、土木工事に従事する者、職工などが多かった。こうして形成されたスラムは、1901（同 34）年に 1600 人、1908（同 41）年に 5859 人、1913（大正 2）年に 7510 人と、彼が移り住んだ頃には拡大の一途をたどっていた。

賀川が 9 歳から 19 歳にあたる明治 30 年代には、国際貿易によって安価

なインド藍やドイツ製化学染料が輸入され、徳島の藍産業は大打撃を受けた。賀川本家の家運も傾き、彼が 15 歳のときに破産している。賀川自身が近代資本主義の大波に翻弄され、その辛酸をなめて青少年期を送っていた。さらに、彼の実母も貧困ゆえに芸者へと身を落とし、身請けされた女性であった。したがって、近代海洋文明の負の側面が集約された港湾都市スラムに身を置くことは、彼自身の存在を揺がした近代資本主義の矛盾に立ち向かう奮闘へと必然的につながっていったのである。

賀川の新川での活動は、後の膨大な社会運動の原点になっている。スラムに入って 10 年後の感慨に耳を傾けてみよう。

> 私自身の理想としては、貧民窟〔原文ママ〕の撤去にあるけれども、今直に貧民窟が無くなら無いとすれば、貧しい人々と一緒に面白く慰め合つて行きたいと思ふのである。之は必しも慈善では無い。之は『善き隣人』運動の小さい糸口である。必しも大きな事業では無い。人格と人格との接触をより多く増す運動である。で、之は金でも出来ないし、会館でも出来ない。志と真実とで出来るのである。即ち貧民窟に住むと云ふことそのことだけが、その使命であるのだ。それで私は、過去満十年間に貧民窟で大きな仕事をしたとは思はぬ。ただ、貧民窟で可愛がられるものとなつたと自覚して喜んで居る。また貧しき人々も、私の処へ来れば、慈善家から受くる親切と違つた、友人として相談が出来ると云ふことをよく知つてくれた。それで凡ての相談を持つて来てくれる。それは記録にもなにも上すことの出来ない友人としての相互扶助である。
>
> この後も、私は貧しき人々の愛の中に生きたいと祈つて居る。［賀川第 9 巻 1963:163-164］（傍点　筆者）(2)

彼にとってその活動は、一過性の慈善ではなく、愛の熱度を港湾都市のスラムに生きる人々の只中に持ち込むことによって、突破口を切り開こうとするものであった。そして、彼自身が、スラムの人々の人格にふれ、絶望的状況のなかにも人間が有する相互扶助の潜在力に気づいていった。そのなかで、彼を物心両面で支える人々が現れてきた。

また、賀川は、海の深淵に瞑想し、潮風に吹かれながら、近代資本主義

のもたらす暗黒面に体当たりし、これを明るいものに転じようと奮闘する。

新川での活動が行き詰ると、さらなる飛躍をめざすため、支援者を求め、活動を続けるに足る生活の糧を稼ぎ得る学位を身につけようと、同志たちに留守を預かってもらい、アメリカ留学を決行した。賀川は、スラムを生じさせてしまう近代文明の不条理を解決するためには、貧困者の救済とともに貧困者をつくらない実践が不可欠だと悟る。労働運動、農民運動へと飛び込んでいくことは、必然的な跳躍、潜水であっただろう。

大労働争議から互助の組織へ

第一次世界大戦が、資源、エネルギー、市場を占有しようとする近代資本主義の自己展開の延長線上に勃発すると、造船、補給品製造、運輸に携わる神戸は大戦景気に熱狂したが、ほどなくして戦争の終焉とともにかつてない不況に見舞われた。プリンストン神学校・大学留学から帰国後、鈴木文治らが創立した労働組合である友愛会に参加した賀川は、この大不況に端を発する労働運動の全国的うねりのなかに身を投じる。そして、神戸で発生し、戦前最大の労働争議といわれた川崎・三菱造船所の大争議（1921（大正 10）年）に指導者の一人として関わっていく。前年から『死線を越えて』が爆発的売れ行きを見せ、時の人となっていた賀川は、最も名の知られたリーダーとなった。このとき 3 万 5 千名の労働者が、当局が禁止したデモ行進に参加した。助け合いを活動の本分としてきた彼は、ここでも労働者と資本家双方の人格をないがしろにしない非暴力的実践と解決を模索した。45 日間に及んだ大争議は、デモ行進における警官隊と群衆の衝突を機に、騒擾罪の適用、幹部の一斉検挙、1300 名に及ぶ大量解雇、敗北宣言という結末を向かえたが、戦前の労働運動史上に大きな足跡を残し、賀川は『死線を越えて』の印税の全てを犠牲者の保障、新事業開拓へと注ぎこんでいった。

彼は、海洋のメタファーをもって大争議を記録した。

> 大水の声は大きかつた。
> 地軸も震ひ上がるほどその声は大きかつた。
> 地球が水の上に浮かび上つたのではないかと思われたほど、その声

は大きかった！

海嘯(かいしょう)も、海潮も、洪水も、瀑布(ばくふ)も、凡(すべ)て声をもつ！

然(しか)し静かに注がれる無産者の血と涙も海嘯と洪水に劣らざる大声をもつ！ ［賀川 第20巻 1963: 56］

賀川は、けっして労働者の権利のみを考えた暴力的実力行使に訴えることをしなかった。あくまでも人格を尊ぶ互助の組織をつくり、話し合いによる解決を志向した。彼は、法律の制定によって労働者の生活を改善する議会主義を主張した。賀川や鈴木文治らの穏健路線は優勢にならず、主流派となった左派の強行路線も当局から弾圧され、戦前の労働運動は衰退していくが、愛による互助組織をつくろうとした賀川の情熱は衰えることはなかった。

仕事を失った農民が港湾都市に流れ労働問題が生じることに着目し、当時人口の9割を占めていた農民の互助組織をつくろうと、初の全国的組織である日本農民組合を友人の杉山元治郎とともに誕生させている。

大震災、近代文明の脆弱性

1923（大正12）年9月1日午前11時58分に発生した巨大地震は、東京、横浜の脆弱な都市基盤を壊滅させ、死者・行方不明者は10万5383人にのぼった。賀川は、翌9月2日の朝刊を見ると同時に、同志たちと神戸の青年会館に集まり、救援を協議し、午後四時の救援船山城丸に乗り込んで横浜港へと向かった。独力で現地状況を把握した後、再び関西に戻って支援金・救援物資を携えて東京入りし、隅田川東岸の商工業地域で最も被害が大きいといわれた本所(ほんじょ)区にテントを貼って救援活動を組織した。本所の陸軍被服廠(しょう)では3万8千人が工場内で焼死していた。

おゝ神よ　あなたは私を泣く為に作り　悲しみの子として地上に産みつけた。私はあなたの名の為めに十四年間を貧民街の路次で暮した。そして十四年後　漸(ようや)く衣服を配り歩かなくてもよくなつた時に　あなたは一度に　私の護つた貧民街より幾百倍も大きな窮民都市を作り給ふ。［賀川 第21巻 1963: 290］（傍点　筆者）

賀川が本能的に恐怖したのは、首都がスラムと化していくことであった。

彼は、神戸での経験を救援の場に持ち込もうとした。

私が本所でしたい仕事は、要するに神戸の仕事をその儘(まま)ここへ持つてくることであつた。

私の第一にしたい仕事はセツルメントである。此の冬を通じて罹災(りさい)者の困苦を自ら体験し　バラックの苦悩を自らも一緒に味ひ　それを科学的に調査して　世間に訴へることである。つまり私は『眼』になりたいと云うことであつた。

統計報告には『心』が書いてない。救貧運動の根本は心である。物質の欠乏より起る心理的反応である。悩みである。悶えである。さうした罹災者の悲しみを統計で現すことは到底出来ない。それはどうしてもセツトラーとして　テントや　バラツクに住んでみなければわからない。［賀川 第 21 巻 1963: 301］　（傍点　筆者）

震災救援活動をきっかけに、賀川の活動は、関東での拠点をもつことになる。各地に広がる労働運動や農民運動においても、彼の視線は首都そして日本全域に拡大されることになる。

私に一人の恋人があります―それは日本です―花の乙女の日本です。誠に日本こそ我等の最も愛する恋人です。

乙女なる日本は魂の底まで火傷を致しました。

『死』さへ　恐怖して逃げ出した阿鼻叫喚(あびきょうかん)の巷(ちまた)には　あはれや気を狂はせた多くの魂が火焔の下に捨てられてありました。

癒されない魂として　涙さへ蒸発して　たゝ”悩む為め灰の中にわが恋人なる日本が捨てられてありました。［賀川 第 21 巻 1963: 297］

賀川は、寺田寅彦のような物理学者と同じく先見の明をもっていた。この震災を単なる自然災害としてはとらえず、人間の営みが招いた人災の側面を強く有することを早くから見抜いていた。

私は江戸以来の凡ての文明が全く亡びて了(しま)つたことをつく”～考へ

> た。（中略）浅草の伽藍も完全に建つてゐる。その時すぐ私の頭に浮かんだことは　信仰で建てたものは強震にも耐えると云ふことであつた。信仰と　正直と　忠実を以て建てなかつた明治　大正の建築物は凡(すべ)て振ひ落とされて了つた。［賀川 第 21 巻 1963: 297］

しかも、賀川は、死者 1522 人、行方不明者 1542 人を出した 1933（昭和 8）年の昭和三陸地震・大津波でも救援活動を行っている。

漁業国日本の使命

賀川研究においてほとんど注目されることがないが、賀川が漁業に従事する人々の生活向上に傾注した努力には相当なものがある。彼は、無数の漁港をまわり、研究を重ねて漁村青年を主人公にした小説を書くとともに、漁業協同組合の可能性を説いた。

小説『海豹(あざらし)の如く』（大日本雄弁会講談社、1933（昭和 8）年は、日本全国の主要漁港にふれている。小説を書いたねらいは、流行作家である自分が漁村問題を扱うことで、世間の関心を呼び覚ますことにあった。

実際、『死線を越えて』の成功により内務省、衆議院、貴族院が貧民問題に関心を示し、六大都市の不良住宅改良法案が国会を通過してスラムの住環境が劇的に改善されてもいた。この経験から、論文のみならず小説によって世論に訴える重要性を感じていたのである。

賀川は、魚を糧とする日本ほど漁村に依存している国はないにもかかわらず、これほど漁村を虐待しているところはないと嘆いた。『海豹の如く』の序文では、漁業民の幸福なくして日本の未来がないことを力説している。

> 我々の先祖は海から来た。然し、今の日本人は、その出生地を忘れようとしてゐる。漁民は嘆き、漁村は頽(すた)れ、海を懼(おそ)るゝ者が、日日数を増してゆく。彼等を救ふものは日本を救ふ。海は日本の城壁であり、海は日本の大路である。海を理解することなくして、日本の運命は打開出来ない。［賀川 第 16 巻 1963: 107］

海に繁栄の多くを負いながら、そこを生活の場とし海洋資源を国民に提供している漁業民が搾取され、悲惨にあえぐような国は、賀川にはあまりに冒涜的に映った。彼の情熱は、どこまでも漁業民の生活に入り込もうと

し、『海豹の如く』には現代でも深刻な問題になっている海賊の襲撃さえ描かれている。

また、1939（昭和 14）年に「漁業組合の理論と実際」という講演を行った。そこで、彼は、日本人は世界一の漁業国民であり、米国の漁業の多くは日本人が教えたものだと指摘している。そして、漁業民の生命を守り、資本家の機械製造独占に対抗する保険組合と機械力利用組合を説き、新たな機械の発明についても論じている。さらに、『日本協同組合保険論』（1940（昭和 15）年 10 月刊）でも「漁業保険組合の諸問題」の一章を設け、持論を展開している。

彼の目には日本は世界でも珍しい漁業国だと映っていた。未発表ノート『瀬戸内海』、『海洋研究』、『水産研究』、『漁業・米穀問題・経済心理』や手稿「漁村のクリスマス」、詩「真鯛のごとく」、全漁連の機関誌「漁村」に連載し全国漁協青年に愛読されたという「銀鮫の進路」（1941（昭和 16）年）などを見れば、彼の漁業問題への関心がいかに幅の広いものであったかが分かる。

ジャーナリスト大宅（おおや）壮一は、賀川をホーリー・スペキュレイター（holy speculator＝聖なる投機家）と呼び[5]、東廻り・西廻り航路を完成させた江戸前期の商人・土木家にたとえ、新時代の河村瑞軒と表現している［大宅 1951: 19］。

海洋アジアと世界への発信

賀川の活動は 1920 年代から海外の注目を集め、海洋アジアと世界へと一気に広がりを見せていった。

先に述べたように、近代の海洋文明は、近代資本主義の展開によって、旧来産業衰退、港湾都市における貧困とスラムの形成、埋め立てと濫開発、自然資源乱獲や工場汚染による環境破壊、植民地・資源獲得競争の果ての戦争といった深刻な悪循環をかかえてきた。富と発展をめざしながら、こうした悲惨を招いてしまう文明の矛盾は、日本だけの問題ではなかった。賀川はこの矛盾が最も集約的に現れる港湾都市のスラムで、近代文明の限界を乗り越える方途を求めて奮闘していた。したがって、彼が世界から注目されたのは十分にゆえあることだった。近代資本主義の歯車に蹂躙され

る人間がいる。破壊される環境がある。そのような近代文明の欠陥は修復されなければならない。そう、賀川は考えた。

彼は、プリンストン神学校・プリンストン大学留学後、大正デモクラシーの論客･吉野作造に推薦されて YMCA 自由大学講師として 1920（大正 9）年 8 月初めて上海に渡り、応用社会学、聖書講義を担当している。このときに上海のスラムを歩いてまわり、書店主で日中交流に尽した内山完造の仲立ちで孫文や五四運動の指導者・陳独秀らと会談してスラム問題の緊急性を説いた。

求められ訪問した地域・国々では彼との交流を希望する無数の都市、大学、教会、施設を巡り、講演、集会、会議で埋め尽くされた。賀川が呼ばれたのは、キリスト教伝道、防貧施策、協同組合指導のためであるが、とくに協同組合の実践については 1920 年代のヨーロッパ訪問で多くを学び、これを日本で応用して、世界恐慌のただなかの 1930 年代にアメリカ合衆国全土とヨーロッパ諸国に新しい知見を提供するまでになった。次節でふれるが、七つの価値に対応し連携する七種の協同組合の構想は、アメリカ合衆国に向かう太平洋上の船室で講演草稿としてまとめられ、*Brotherhood Economics* として出版されて、世界 17 言語、25 の国々で翻訳紹介された。

筆者が彼を二十世紀における〈東洋の使徒〉と呼ぶゆえんは、二十世紀の文明の病を最も深いところで受けとめ、キリスト教のもつ宗教性に新しい息吹を吹き込み、それでいて東洋人としての主体性を失わず、世界に愛良と互助のメッセージを届け続けたことによる。

今日からふりかえると、賀川は、海洋アジア、南北アメリカ、ヨーロッパ中東の三つのエリアで、伝道・講演・指導を行っている。

台湾、旧満州地域を含め中国に 13 度訪問、フィリピンに 3 ヶ月、オーストラリア、ニュージーランドに 5 ヶ月、インドに 4 ヶ月滞在している。

北米とヨーロッパは 1924（大正 13）年から 1925（同 14）年の 8 ヶ月余、1935（昭和 10）年から 1936（同 11）年の 10 ヶ月余、1949（同 24）年から 1950（同 25）年の 1 年余と長期の遊説を三度含む。カナダに 3 ヶ月、ブラジルに 5 ヶ月、個別に訪問してもいる。

すなわち、比較的フットワークの軽い海洋アジアと息の長い欧米。この二つに彼の海外活動を分けることができる。賀川は海洋アジアと欧米世界

をつなぐ稀少な存在になっていった。

賀川の海外活動の膨大な記録をたどるのは一筋縄でいかない作業であるが、海洋アジアと欧米世界の関係を考えるとき、とりわけハワイの記録が興味深い。太平洋の中心に位置するこの島嶼地を賀川は、1914（大正 3）年、1924（同 13）年、1935（昭和 10）年、1950（同 25）年の 4 度訪れている。船で北米を訪れる中継点だったためでもあるが、賀川はこの地に特別な思い入れを持ち続けた。無名時代にアメリカ留学の道中立ち寄った 1914 年を除いて残りの訪問を拾えば、ハワイの新聞メディアにおいて少なくとも大小 150 を超す記事が発見できる(6)。

そのなかから、いくつかの見出しを拾ってみよう。

1924 年は「昨夜仏青（ぶっせい）に於ける賀川氏貧民窟講演　大入満員の大盛況　聴衆は九百名以上に達す」「労働者は尊敬さるべきであると賀川豊彦氏比島人罷業（ひぎょう）者に演説す　資本家何者ぞ」「賀川豊彦氏は蟹（かに）の研究者　博物館で私の専門だと動かぬ」が興味深い。仏教青年会館でも講演するなど宗教の垣根を超えた行動、ストライキに入っていたフィリピン人労働者たちの集会で演説したこと、海洋生物への少年時代からの関心が持続していたことなどが読み取れる。

1935 年は「昨夜も二千の聴衆　賀川氏の大講演　布哇の文化的使命を促がす　「太平洋文明の建設」」「賀川氏の“協同組合運動”をコナ聯協（れんきょう）で実現化　献金九十四弗（ドル）を協会に寄付す　農村更正の大講演会」が注目される。彼が、海洋アジアと南北アメリカの間に平和の「太平洋文明」を打ち立てることを力説したこと、協同組合運動をハワイに根づかせようとしたことが分かる。

1941 年にも「賀川豊彦氏来布（らいふ）中止　けふ當地の関係筋へ通知」「日本送金不能を機会とし此地に投資せよ　子孫将来の発展に資する所以　時局を語る賀川豊彦氏」など見逃せない記事がある。太平洋戦争回避を願った賀川は、キリスト教平和使節団の一員として渡米した折、ハワイ訪問を実現しようと望んでいた。日米間の緊張から直接帰国となり、それが中止になってしまったことをハワイの報道は惜しんでいる。

1950 年は「日本は暴力用いず　社会革命を完成　基教（ききょう）精神で原子戦を救へ　賀川豊彦氏元気で来る」「犠牲の精神により世界を救ひ得る　一千越ゆ

る聴衆に感銘与えた賀川豊彦氏の獅子吼（ししく）」の記事から、核戦争を憂え、平和のメッセージを発したこと、太平洋戦争後もハワイでの賀川に対する関心がいぜんとして高かったことが分かる。

ハワイでは著名人の訪問は一大イベントであった。日本からも多くの名士が訪れ、仏教、神道、キリスト教の宗教家たちも日系人への布教と伝道に足を運んだ。日布（にっぷ）時事社長をつとめた相賀（そうが）安太郎は、自著『五十年間のハワイ回顧』（1953（昭和 28）年）のなかで、「キリスト教側の名士は千客萬来の中に、やはり何と云われても賀川豊彦氏が、なにか根深いものを此の地に残してゐる。その貧民窟での貴い經験、該博なる科學知識、燃える如き熱誠が、ものを言つてゐる。」と賀川の印象を語っている［相賀 1953: 279］。

彼の訪問時には、日本語と英語の講演会に加え祈祷会、婦人会、子供のための賀川自作の童話朗読会、映画『死線を越えて』上映会、昼食会、夕食会があり、講演テーマも防貧、キリスト教、農業、協同組合、文明建設など多岐にわたり新鮮な話題にあふれていた。賀川は、日系人社会だけでなく、フィリピン人や欧米人の集会にも請われて参加した。

賀川の海外活動の多くが日本では顧みられていないけれども、世界中に膨大な記録が残されている。それら海外資料の内容分析と彼がどのような種を蒔いたかの検証は、これからの研究課題である。

祈りの場、太平洋

賀川には 26 才年長の新渡戸稲造を悼んだ「永遠の青年」という印象深い詩がある。新渡戸は日本初の医療利用組合である中野組合病院開設などで協力し合った仲であり、国際連盟事務局次長時代に賀川をスイスの自宅に招いている。満州事変後の日米関係を憂えて太平洋問題調査会理事長を務め、北米に渡って打開の道を探ろうとする途上、1933（昭和 8）年にカナダで客死した。

永遠の青年　カガワトヨヒコ
大きかつたね
その輪郭は―
すっきりしてゐたね
その肌合は
武士道に

世界魂を注入した
その気魂は
日本の島に容れるのには
少し大き過ぎたね
年と共に
若くなる
あの気持ちよい
霊魂—
どこから　あゝした
若々さが湧くだらうかと
いつも感心させられた
永遠の青年！
（略）
［新渡戸稲造全集編集委員会編 1987 : 542-546］（傍点　筆者）

新渡戸の魂の大きさを讃える言葉は、その遺志を受け継ごうとする賀川自身の決意にも読める。歴史学者でエール大学教授の朝河貫一（あさかわ）など、日本のアジア政策の行き詰まりと日米の衝突を憂え戦争回避に努めた人間は少なからずいたが、主流になりえなかった。

賀川も、日中戦争（1937（昭和 12）年）、太平洋戦争（1941（同 16）年）に向かう大勢の前では、ほとんど無力であった。全国非戦同盟（1928（同 3）年）、クリスチャン平和連盟（1932（同 7）年）、生活協同組合、松沢教会（関東大震災を契機に東京の下北沢に拠点を置いていた）を拠点とした反戦平和活動、憲兵隊による拘束、瀬戸内海の豊島（てしま）での半幽閉生活など議論すべきことは多い。満州国や日本政府との関係もふくめ、批判的な検証と研究は未だ十分になされているとはいえない。

しかし、筆者は、満州事変から太平洋戦争終結までの賀川を、安易に殉教者を期待する気持ちで眺めるべきでないと考える。泥にまみれ、良心の呵責に責め苛まれ、活動の場を狭められて喘ぐ過ち多き一人の人間として接近したい。

賀川は、日本と中国の戦争回避のために、国際的人物としてマハトマ・ガンディーを日本に招いて調停を図ることも考え、ノーベル文学賞の詩人タゴールの紹介者として知られる高良とみ女史に計画を託し、1935 年にインドに派遣したこともあったという［高良 2002: 219］。

さらに 1941（同 16）年、賀川はキリスト教平和使節団の一員として渡米した。この使節団自体は、日本政府の圧力によって合同を余儀なくされてゆく日本のプロテスタント教会の事情を合衆国のキリスト教会に理解して

もらうことが目的であったと言われている。しかし、次の証言にあるように、賀川自身は、日中戦争を終結させ日米の融和を図ることを企図して、近衛文麿首相の密命を携えての渡米であった。

> いま日本は日支事変で勝った、勝ったと景気の良いことをいっているが、実は四年間も収拾がつかないで弱っている。終止符を打つためには調停者に頼まなければならない。（中略）今度蒋介石と近衛さんとの間に立つものはフランクリン・ルーズベルト以外にない。そこで近衛さんは私にルーズベルトを説き落としてくれというのです。（中略）ルーズベルトと会って彼をとうとう説きふせたのです。そして近衛さんと洋上会談するなり、何なりして日支間の調停役を引き受けてもらうようにチャンと取りきめてきたのです。ところが、どうですか、（中略）つい一週間前の七月二十三日には突然日本軍が仏印に進駐し出したではないですか。ワシントンぢゃカンカンですよ。わたしの計画は全く水泡に帰してしまいました。ルーズベルトから〝カガワ、これではどうにもならない。近衛さんとの会談の件は取り消してくれ〟といって来たのです。［園部 1964］（傍点　筆者）(7)

ルーズベルト大統領との交渉が不毛に終わって帰国の途上、賀川は 1941 年の夏、太平洋上の船室で次の詩を書いている。

私の修道院	暑さも忘れて
風通しの悪き	私は静座するよ
その窮屈な船室の	太平洋上の殿堂
隅つこに	私の修行場
私の永遠への	雲と水とが
途が開かれてゐるよ	そこに接吻する
そこが私の	あゝ修道院、修道院！
修道院だと思へば	［賀川　第 20 巻 1963: 153］(8)

賀川にとって、海は驚きと美に満ちた平和的発展の場であった。太平洋は祈りの場であった。そんな彼にとって、追いつめられ残された最後の手段は、宗教者として祈りに訴えることであった。真珠湾攻撃 5 日前の手稿

にそれが記されている。

　徹夜の祈り
火鉢をかこみ
土べたの上に
ひざまづき
祈るは
太平洋の
青きを
保ち給へと―
夜は移り
闇はふかまれど
われらの祈りは
つきず
茫漠三千里
海のかなた
祈りの友もまた
嘆きつゝ
曙を待つ
あゝ
我らの祈は十年にして
未だきかれず
棺（ひつぎ）の蓋（ふた）おほて
まだ祈るべきのみ
一九四一・一二・三・
［賀川　第 20 巻 1963: 155］
（傍点　筆者）

「我らの祈は十年にして」とあるのは、賀川が満州事変以降、同志と 10 年間平和を願う祈りを続けてきたことを意味している。しかし、この祈りはかなえられなかった。

> 一九四一年十二月、日米戦争の風雲急をつげた時、私達は神田キリスト教会を第一夜として、一週間連日連夜―打続く祈祷会を開いた。燈をつけ、その燈を提灯につけて、祈祷会を持ち廻つた。そして一週間の最後の日に蠟燭の火を消した瞬間に、真珠湾攻撃の号外を受取つた。この祈祷会は米国ワシントンでも同時刻に一週間、徹夜して祈られたものであつた。［賀川　第 24 巻 1963: 464］（傍点　筆者）

真珠湾攻撃は同年 12 月 8 日未明。賀川の願いも空しく太平洋が戦場の海と化した瞬間であった。鈴木大拙が『日本的霊性』を、柳田国男が『先祖の話』を執筆し、日本人の生死と救いについて思考を沈潜させているとき、活動を停止された賀川もまた精神の仕事に集中して、大作『宇宙目的論』の著述に専念していた。人間を含むこの宇宙に存在する根源的な悪の問題

と格闘し、新川に入って以来持ち続けてきた疑問に結論を出そうとしたのである。

太平洋の平和を求めた賀川の願いは、敗戦後、戦後復興と世界平和構想へと一気に拡大して再起動を始め、いくつもの俊敏な行動となって現れる。労働組合、農民組合、生活協同組合をはじめ各協同組合の再生と組織化を図った立法運動、荒廃した精神の復興を目的とした新日本建設キリスト運動、平和のための新体制構築を目指した世界連邦建設運動、核兵器廃絶運動はその最たるものである。戦後の賀川の俊敏さは、太平洋戦争突入までと遜色ないものだったように思われる。

それは、いかなる民間人よりも早く、平和構築をめざして連合国軍最高司令官マッカーサー（8 才年長）に公開状を（1945 年 8 月 30 日読売報知新聞）、そして、韓国初代大統領李承晩（イ・スンマン）（13 才年長）に公開書簡を（1955 年 12 月 8 日毎日新聞）送り、レスポンスを得ていることからもうかがい知れる。いずれも、世人の批判と誤解を受けることを知悉しながら、暗闇のなかに呻き、彼が捧げた創造的祈りの表明であった。

賀川の遺産は、見えにくくなってはいるが、現代社会のただなかに未完成の状態で遺されている。

3. 思想と海洋

海と人間の本質

海は人間をつなげる。海は遠くにあるものを近くに運ぶことができる。物量とスピードを海は可能にする。この物理的特性が世界の経済を動かしている。現代も 9 割の物流が海運によっている。

おのれの意識が暴走し無慈悲になるとき、人間は海を踏み台にして、世界に悲惨をまき散らす。海の現実には経済競争の激化、相互不信を根にもつ軍拡や環境破壊がある。人間は海によって意識作用を通じて世界とつながる。そのことで繁栄とともに悲惨も生まれた。

しかし、海を人間の意のままにできると考えるのは、思いあがりである。大津波は人間の想像を遥かに超えている。海は奪う。だが、海は与え、癒

す存在でもある。人には海を求める本能がある。地政学や経済問題を考えるためだけではない。心を映すために海を見る。海は人の心を映す鏡であり続けて来た。誕生、青春、友情、恋愛、家族、黄昏、終焉、浄土を、海は映してきた。

海を舞台にした人間の意識の持ち方こそが根本的な問題である。海という自然の基盤に人間がどのように意識作用を加えるかで、現れる文明も異なってこよう。人間の意識作用が海の自然を利己的、排他的繁栄の手段とすることに傾斜していけば、搾取、環境破壊、大災害、戦争を招来するだろう。

海底と信仰

賀川にとって、海は、利用手段、地政学的対象であるにとどまらなかった。海は、両親を亡くした孤独な心をなぐさめてくれる遊び場であり、驚きと美を学ぶ学校であった。幸運なことに、彼は、少年時代、海にもぐって海中の彩り豊かな美にふれることができた。郷里の吉野川下流域も海に近い生活環境であった。潮風を彼はいつも体感できた。成長してから、海は自然研究と瞑想の場となった。

賀川の自然との関わりは海にはじまった。海洋学者レイチェル・カーソンのいうセンス・オブ・ワンダー、すなわち、驚くことの感性を海の自然のなかで育んだのである。彼は海にもぐって、精神のなかに沈潜することを覚えた。障害物がなく摩擦が少ない海上のみならず、無限の豊かさに満ちた海底の海を賀川は理解した。海に潜り、海の底の世界に魅せられた精神である。イエスの教えに出会う前から、彼は海に学んでいた。

また、生誕と青春の地、神戸と成長の地、徳島を、瀬戸内海が結びつけていた。それは広い太平洋を感じ取ることのできる海だった。港は賀川にとって開かれた世界の啓示であった。人間の文明世界に開かれていただけではなく、神の慈愛に満ちた世界に開かれていた。彼は、徳島でアメリカ人宣教師チャールズ・ローガンやマヤスと出会い、海の彼方から来た福音を受けとめた。信仰はかすかなものである。圧倒的な物流にかき消される、か細いささやきといえよう。しかし、それは、求める者にとって確実に存在する何かであった。

賀川は自然の波とともに神の波をキャッチした。それからの彼は海に神の言葉を聞こうとした。賀川にとって海は、信仰を励ましてくれる存在となった。海底に潜る体験にたとえ、心の底に沈潜した。

> 私は、社会運動に疲れたからと云ふて、活動写真などは見たくは無い。私の最も好きなのは紺碧（こんぺき）の海に沈んで、竜宮のやうに美しい岩壁の穴に手をつき込んで螺蟀（さざえ）を採ることである。（中略）あの強烈な海の色彩の印象と、螺蟀と云ふ動物に連想される色々な伝説とが、私の頭の中でキリ～廻ひをするからである。私は幼い時に、阿波(あわ)の小松島の北東の『大神子（おおみこ）、小神子（こみこ）』の烏帽子（えぼし）岩に游いで行つて毎年螺蟀取りをした。その後私は海とは常に親しい関係に置かれて居るが、まだ、大神子の螺蟀取り程、私を悦ばしてくれたものは無い。
>
> （中略）私は海の上を見るよりか、海の底を見る方が好きである。海は私を誘惑する。［賀川　第 21 巻 1963: 65］(9)

海底に思いがけず美しい貝殻を見つけるように、賀川は、精神の沈潜によって、美しい生き生きした言葉やアイデアを拾い出してきた。そして、意識の壁を打ち破り、新たな社会のシステムを編み出しては、その有効性を試し続けた。

海は慰めと驚きを与え、美と瞑想を教えた。開かれた世界への啓示を与えた。賀川は海から、神秘と愛を紡ぎ出した。もし、眼前の自然（＝海）の豊かさと見えないもの（＝神）の愛がなければ、あのような力に満ちた活動は展開できなかったのではないだろうか。

発見・発明／愛／協同～賀川豊彦のメッセージ

賀川のメッセージは、新たな発見と発明、宗教的信念に基づく愛、人々が協同するシステムの構築によって共存し、発展する社会をつくっていくことができるという、意識の覚醒を求めるものだった。それは、地域社会、日本、海洋アジア、世界に当てはまり、それぞれの場で拡げていくことができる性質を有する。意識の覚醒は、新しい活動、組織、制度の試みを誘発する。

発見と発明。賀川は、これを激励する。自然を愛し、自然に親しむとこ

ろから、彼はこれらを重視する心をもった。自然にふれるなかで、未知の世界への驚きが生まれる。その驚きこそ発見と発明の原動力である。そして、正しく導かれた研究の知識と技術は、人間の生活を豊かにできると彼は信じた。

愛。それは賀川が、海の彼方から受け取った音信であった。自分の身をかえりみないほどに人の幸福につくそうとするものであり、そうすることで、不思議な逆説として自らが真に意図したところが達成される〈神秘〉である。彼は、この愛の実践者であったイエスの例に習い、自らも愛の熱を社会のなかに持ち込もうとした。

協同。21 歳で愛の実験生活に入った賀川は、港湾都市神戸のスラムで、数々の悲惨に翻弄され互いを傷つけながらも助け合いの気持ちを失わない貧しい人々の生き様にふれた。さらに、留学したアメリカで労働者が団結して行進し、生活改善を訴える姿を目撃した。また、自然観察と進化論のみならず最先端の科学知識を学び、優勝劣敗の生存競争だけでなくフランスの昆虫学者ファーブルが描いたような共助の現象が自然界に見出されることを研究した。賀川は自然界と人間社会を共に眺め、いたるところに協同の萌芽を発見した。そして、行き詰まった人々に愛の熱を持ち込むことによって、新しい協同の仕組みを次々に発明でき、これを有為なものに育て上げ得ると確信していく。発見と発明、そして愛の精神は、賀川において、協同のシステムをつくりあげるために作用したのである。

この発見と発明、愛、協同の意識作用を、賀川は、自然と〈神〉から学ぶことによって引き出してきた。それによって、人間社会の悲惨を光に転じ、文明にともなう闇を修繕しようとした。

彼にとって幼少期から親しんだ自然は、海の近くにある、海とともにある自然だった。したがって、海をめぐる舞台において実践をすること、海を背景とする生活の場において、自然の驚きと神の愛を感じ、そこからエネルギーをつむいで発見と発明、愛、協同に力をつくすこと。このことは、本能に近い行動パターンとなっていた。

そして賀川は、次のように人間をふくむ自然を眺めるようになる。

この世界には、七つの価値を認めることができる。それは、生命、力、自由、成長、選択、法則、目的である。人間もまた、生命を受け、生きる

力を得、自由によって、成長し、良いものを選択し、秩序と法にかなった集まりをつくり、生きる目的を達成する。この七つの価値を、自然界の様々な生物たちから宇宙そのものにまで認めてみよう。そうすれば、人間もこの価値を実現すべき存在ではないか。したがって、これら七つの価値のいずれもが、抑圧されず、支えられるような仕組みを社会のなかに実現していかなければならない。人間の経済もこれら七つの価値を支援するものでなければならない。

賀川は、このように考え、七つの価値を保障する人々の愛と協同の組織として、ユニークな協同組合の構想を打ち立てた。生命を支える保険組合、労働する力を支える労働組合、自由な交換活動を支える販売組合、人間の社会的成長を支える信用組合、人生の良き選択を可能にする共済組合、秩序や法にかなう社会基盤づくりに貢献する利用組合、良き生活目的を消費から支える生活協同組合である。

彼は七つの価値がそれぞれ緊密に結びつき、いずれが欠けてもならないように、それら価値の実現を支える各種協同組合も互いに連携し合い、それぞれに調和して力を発揮すべきだと考えた。そして、この七種協同組合による柔構造の創造・維持・発展に、発見・発明、愛と協同の力が不可欠だとした。とりわけ、他者の幸福につくそうとする愛は、協同のシステムをつくり、支え、発展させていく不可欠の酵素と位置づけられた。

賀川は早くから、互いに助け合う精神の重要性を説いていた。

> イエスは、人間の心の本質に於て、『己(おの)れ人にせられんとする事は、亦、人にも其如くせよ』と云ふ互助の法則を発見せられた。此を、特に金則と呼ぶ。之は神の国を支配する諸法則のうち、最も根本的なものゝ一つである。［賀川　第 1 巻 1963: 310-311］（傍点　筆者）(10)

愛による協同は、ここで述べられている互助の法則の、さらに洗練された、もう一つの表現ととらえることができる。

賀川は、競争や発展そのものを否定しない。しかし、不要な衝突を招いてしまうような行き過ぎた資本主義や暴力革命に対しては、文明の破滅につながることを憂えて根源的に反対した。生命価値から目的価値へとつながる諸価値の豊かな発現をこの世界に見ようとした彼にとって、経済恐慌

や戦争、環境破壊をもたらしてしまう激烈な近代資本主義とその反動としての暴力革命は、自然とつながっている人間にとって、不自然きわまりない活動と映じた。

> 今日の社会経済は発明と発見によって、進歩したものであつて、決して闘争によって、進化したものではない。発明と発見は、心理的なものであつて、唯物的なものではない。（中略）人間を物と考えるならば、それまでのことであるが、「生命」と「労働」と「人格」を基礎とする社会であるならば、心理的価値判断には支配されるけれども、物質にのみ従属するものではない。マルクスは『その時代の文明は唯物的生産の形式によつて、主として決定せられる』というけれども、私は『文明はその時代における意識の覚醒の程度によつて支配される』と考える。その意識の覚醒が階級的にのみ、目覚めているものは唯物的暴力闘争を好み、国家の全体主義にのみめざめているものは、ヒットラーやムッソリーニを産む。真の社会主義は、宇宙意識にめざめた全人格組織に外ならない。マルクス的科学社会主義は、人格の知的一部分しか説明しない。社会進化は闘争から生まれるよりも、協同と、発明及び発見によつて、促進されることが決定的である。それを忘れて流血革命が科学的だというところに、いわゆる科学社会主義の破産がある。［賀川 第4巻 1963: 441］（傍点　筆者）

賀川にとって、商品も流通も、そして金融でさえ、自然とのつながりのなかで人間の意識作用がともなってこそ生み出され、発現してくるべきものだった。人間の意識が空転し、自然とのつながりを欠き、価値とのつながりを損なった経済は、彼にはとうてい満足できないものだった。

賀川は、遠くのもの同士が海によって結びつくとき、そこに搾取、恐慌、戦争が立ち現れないようなシステムをつくることが必要だと考えた。よって、離れているもの同士の協同も自明なものとした。

それゆえに、彼は、海を越えた国際的協同組合ネットワークを志向し、相互発展につながる協同組合貿易や国際金融支援の必要性を主張した。優勝劣敗でなく、利益を相互に共有できるような経済が身近なところから世界にいたるまで、探求し、試行されるべき目標であった。

人と人を接近させる海。海を舞台とする接近のなかに、愛と協同を供えようとした賀川豊彦。その信念は、まさに、鮮烈な自然観察と生きた信仰から紡ぎ出されていた。彼は、人、社会、文化、文明を接近させる物理的条件としての海とともに、愛と協同の源泉たる自然の一部、神の舞台としての海を把握していたのである。

4. 文明的課題に対する総合的アプローチ

自然と調和し、人々が共存して、豊かな社会をつくっていくこと。月並みに見えようと、これが総合的に海洋文明の課題を考える上で分かりやすい手がかりではないだろうか。

私たちは、自分たちが海に多角的に関わっていることを簡単に忘れてしまいがちである。なぜ、海に関わるときにもっぱら分析してばかりいるのだろうか。あるいは分析なく、愛でてばかりいるのだろうか。防災、通商、観光、安全保障、芸術、宗教は、すべて人間の営みである。いずれも人間の営みとして総合的に考える視点が重要である。海は、津波などの人知に余るエネルギーを発するのみならず、これら人間の営みを結びつける作用をもつ。自然と調和し、人々が共存して、豊かな社会をつくっていくというヴィジョン。その実現のために自然への深い感受性と謙虚な知恵が必要である。

自然は人間の想像を超える。ここでいう自然との調和は、単に自然にやさしくという意味ではない。自然に対し鋭敏な感受性をもち、自然に学び、その美に感動することができ、また、自分の不完全性を知る。そのような精神をもって、自然とともに生きることをいう。

このヴィジョンにおいて、賀川豊彦という人物の事跡が、突として浮かび上がってくる。賀川は、伝道と社会事業の指導のために日本全域、海洋アジア、世界を廻った。彼の海洋文明観に独創的なところがあるとしたら宗教、経済、科学、社会事業、詩の融合した眼で海洋文明を見つめ、社会の未来を展望しようとしたことだろう。彼の深い洞察力は、総合的人間性から出ていた。

私たちは、賀川から、萎縮した心をときほぐし、勇気と希望をもつべきことを思い出させられる。彼はなぜ、新しい社会を望みつづけることができたのだろうか。自然を前にし、常に可能性ある社会のヴィジョンを視、その実現に邁進した。異常なまでの事業魂を一般人に感ぜしめた。その精神が継承されるためには、賀川から、活力の源泉たる自然と神への接近、そこから得た力をいかに社会に適用するのかという知恵を学ばなければならない。賀川はキリスト教を説いたが、他の宗教を尊重していた。彼の説くキリスト教に耳を傾けながら、自らの無宗教、宗教について深くその意義をとらえなおすことである。試みに、愛も協同もまったくない世界を考えてみよう。人間は、そのような世界に住むことができるだろうか。

文明でいえばおごることなく海から慰めと開放性を得られる文明。都市でいえば美しく、発展し、慰めのある、海の向こうの世界と協同できる海洋都市。そして、理想的には、その海洋都市は環境も、防災も、産業も、観光も、心の満足も、トータルコーディネートされている。そのようなものとして、世界の人々とつながることを賀川は求めていたのである。

註

(1) 賀川豊彦の海洋性に注目した先行研究はみられなかった。宗教学者の金井新二が次のような感想を述べているのみである。「私は今回彼の生誕百年記念で神戸に行ったとき、彼の明るさと広さは「海洋的」なものであると思った。」［金井 1989：271 頁］
(2) 賀川豊彦「貧民窟十年の経験」『人間苦と人間建築』警醒社 1920 年
(3) 賀川豊彦「焦土を彩色せんとして」『地球を墳墓として』アテネ書院 1924 年、1923 年 11 月 13 日執筆
(4) 賀川豊彦「おゝ我等は狂ふ」『地球を墳墓として』アテネ書院 1924 年、1923 年 11 月 13 日執筆
(5) 「ETV 特集　大衆文化の巨人たち」NHK、1999 年 3 月 24 日放送
(6) 2008 年 2 月ハワイ大学図書館での筆者調査による。
(7) 園部は元明治学院大学教授、1941 年 7 月のサンフランシスコ合同教会礼拝後午餐会での賀川の発言。
(8) 賀川豊彦『天空と黒土を縫合せて』日独書院 1943 年
(9) 賀川豊彦「貧民窟生活者の自然美論」『地殻を破って』福永書店 1920 年
(10) 賀川豊彦『イエスと人類愛の内容』（警醒社 1923 年
(11) 賀川豊彦「貧民窟生活者の自然美論」『地殻を破って』福永書店 1920 年
(12) 賀川豊彦『彷徨と巡礼』春秋社 1933 年

(13) 賀川豊彦「戦争は防止し得るか―世界平和の協同組合工作―」（1935 年 11 月 11 日）
(14) 賀川豊彦「神と苦難の克服」（1932 年 9 月 18 日）

参考文献

雨宮栄二 2003 『青春の賀川豊彦』新教出版社。
――― 2005 『貧しい人々と賀川豊彦』新教出版社。
――― 2006 『暗い谷間の賀川豊彦』新教出版社。
大宅壮一 1951 「世界人・賀川豊彦の秘密」『文藝春秋　春の増刊　第２人物讀本』13-23 頁、文藝春秋新社。
賀川豊彦 1935 『布哇に於ける賀川豊彦氏講演』大久保源一編、ヒロ、エスの僕會発行、布哇毎日新聞社印刷。
――― 1962 『賀川豊彦全集』キリスト新聞社。
賀川豊彦記念講座委員会 1999 『賀川豊彦から見た現代』教文館。
賀川豊彦記念・鳴門友愛会 2003 『常設展示図録　賀川豊彦』。
賀川豊彦記念松沢資料館 1983-2007 『雲の柱』第 1-21 号。
賀川豊彦記念松沢資料館・財団法人雲柱社 2006 『賀川豊彦記念・松沢資料館　中間目録Ｉ』。
賀川豊彦写真集刊行会 1988 『賀川豊彦写真集』東京堂出版。
加藤重 1999 『わが妻恋し　賀川豊彦の妻ハルの生涯』晩聲社。
金井新二 1989 「賀川豊彦の現在的インパクト―解題にかえて」『空中征服』賀川豊彦著、日本生活協同組合連合会。
キリスト新聞社編 1991 『資料集『賀川豊彦全集』と部落差別』キリスト新聞社。
神戸史学会 2000 『歴史と神戸　特集・賀川豊彦と神戸』第 39 巻第 1 号 218、神戸史学会。
高良とみ 2002 「マハトマ・ガンディーと賀川豊彦の愛情あふれる思い出」『高良とみの生と著作　第 7 巻　―使命を果たして』ドメス出版。
シルジェン、ロバート 2007 『賀川豊彦　愛と社会正義を追い求めた生涯』賀川豊彦記念松沢資料館監訳、新教出版社。
隅谷三喜男 1995 『賀川豊彦』岩波同時代ライブラリー245、岩波書店。
相賀安太郎 1953 『五十年間のハワイ回顧』「五十年間のハワイ回顧」刊行會発行。
ハワイ報知社 1987 『ハワイ報知　創刊七十周年記念誌』。
園部不二夫 1964 「日米開戦を予言」『賀川豊彦全集　月報 23』3-4 頁。
鳥飼慶陽 2002 『賀川豊彦再発見　宗教と部落問題』創言社。
――― 2007 『賀川豊彦の贈りもの　いのち輝いて』創言社。
新渡戸稲造全集編集委員会編 1987 『新渡戸稲造全集別巻』教文館。

明治学院大学図書館編 1963 『賀川豊彦文庫　仮目録』明治学院大学。
米沢和一郎編、賀川豊彦記念・松沢資料館協力 1992『人物書誌体系 25　賀川豊彦』日外アソシエーツ。
米沢和一郎編 2006 『人物書誌体系 37　賀川豊彦Ⅱ』日外アソシエーツ。
Friends of Jesus 1934 *Kagawa in the Philippines*.
―――――― 1936 *Kagawa in the Australia New Zealand and Hawaii*.
Kagawa, Toyohiko 1988 *Living Out Christ's Love*. (Upper Room Spiritual Classics. Series 2) Upper Room.
―――――― 2007 *Christ and Japan*, Kagawa Press.（Axling, William trans. 1934 New York: Friendship Press の再刊）
Sakashita, Jay 1990 *Toyohiko Kagawa and the Indigenization of Christianity in Japan*, Master of Arts in Religion, University of Hawaii at Manoa.

謝辞・付記

賀川豊彦の一次資料について賀川豊彦記念・松沢資料館の加山久夫、杉浦秀典の両氏に、賀川とその協働者たちの事業展開について賀川督明、賀川一枝の両氏に、賀川の事跡を辿るにあたり神戸市にて西義人、徳島県鳴門市にて田辺健二、磯部浩二、武知忠義の諸氏に、賀川豊彦献身 100 年記念事業等、賀川再評価をめぐる近年の動向について伴武澄氏に、ご教示をいただいた。

ハワイ大学における調査は、科学研究費補助金・基盤研究（B）「宗教の社会貢献活動に関わる比較文化・社会学的研究」（代表・櫻井義秀　2007−2009 年度）による。

本稿の着想は、国際日本文化研究センター・共同研究「「文明交流圏」と「海洋アジア」」（代表・川勝平太　2005−2007 年度）に共同研究員として参加する過程で得たものである。

2011 年 3 月 11 日に発生した大震災を受け、黙祷とともに本稿を捧げる。